宗金鑑に記述されており，出典をみると春朔は広く痘瘡関係の書物を読破していることがわかる．治方に重要性があることは，その後の牛痘種痘法と異なる点と考える．また治方について，その重要性から2代目緒方春朔は天保9年京の平安痘科佐井聞庵に入門している．

池田痘科は，初代池田瑞仙は『痘疹戒草』で，池田霧渓は『種痘弁義』(1858) で種痘法を否定している．しかし佐井聞庵は池田瑞仙に習い，京で平安痘科を任じている池田学派に属しているにもかかわらず春朔の『種痘證治録』に序を記している．さらに子息である長吉は2代目春朔から種痘術をさずけられ，春朔の門人帖に天保9年4月8日入門平安痘疹科佐井有吉有則の記載がみられる．佐井家の門人帖にも2代目春朔の記載がみられ，さらに佐井聞庵の序文から少なくとも種痘を否定していないことがわかる．門人帖に京の医師は11人を数え，中には牛痘種痘法に尽力した桐山玄中がいる．

一般に蘭学は種痘を肯定し，漢方は否定していると言われるが，これは池田霧渓が人痘，牛痘とも種痘を否定したことも一因と演者は考えるが，実際には同じ池田学派でも江戸は否定，京は肯定していたことがわかる．佐井家は聞庵の父親圭斎は解剖学の知識が豊富であると小石元俊から激賞されているので，新進の家風があったと考える．蘭学ではこの当時橋本伯寿は反対で，司馬江漢は賛成しているので，実態は複雑である．

春朔の種痘法は医宗金鑑を主体としながらも独自に改良し，普及した点は日本医学の独自化として評価されると演者は考える．

（平成27年1月例会）

書　評

泉　孝英 編
『日本近現代医学人名事典』

本書は，日本近現代医学史研究の必備書であるとともに，2000年代に発刊された医史学関連書籍の中でも白眉の作といえる．本書が2014年度矢数医史学賞を受賞したことからもそのことは明らかである．人名事典などのいわゆる工具書は，その利便性に比して業績としての評価は必ずしも正当に評価されないことも少なくない．もちろん，国語学や漢文学では「諸橋大漢和辞典」や「広辞苑」のようにそれ自体が高い評価を得ていることもあるが，他分野，特に自然科学系ではこうした事典類の編集は，労力の多さや研究への貢献度に比して，新知見の提出を至上命題とする学的性格も影響し，高評価を得にくい場合が多い．

しかしながら，本書の存在は，いわゆる工具書の概念を大きく越えて，学問的業績としても，新知見の提案に勝れども劣らぬ価値を示している．その理由は，一つには収載されている人名の範囲が，医史学的にみて何らかの事績を残しているという意味での医史学上の人物のみならず，基礎医学，臨床医学，社会医学，さらには看護学や医療に隣接している社会福祉・社会事業，文化・文芸・芸術にいたるまで，およそ医学といくぶんかでも関連のある領域・分野の人名の生没年から履歴事項，事績，場合によりその社会的評価に及ぶ記載を可能な限り行っている点で，類書を圧している．収載期間1868年（慶應4年・明治元年）3月から2011年（平成23年）12月31日までで，その総数3762名の医学関連人物を所載していること，そしてそれが個人的作業であるという点で，まさに偉業という他はない功績である．そして，二つにはその記載内容がきわめて公平・公正で予断を排した客観的記載に努めている点である．こ

れは，学問的な態度として公正な評価と解釈に徹するという姿勢がなければできないことである．どうしても歴史的人物に関する評価には個人的な解釈が伏在しやすいが，本書の編者が努めてこれをまさしく中正に保とうとしていることが随所にうかがわれる．

ただ，これは作業量の限界と編者の理念にもとづくところであろうが，対象を物故者に絞っている．編者は序において，編集開始当初は生存・物故を問わず作業を始めたとされているが，「さまざまな検討を重ねた結果」として物故者に限定したとしている．賢明な判断であると判断されるが，遠からず本書を改訂される際には，その後の追補が期待されるところであろう．

また，本編の人名事項以外にも，序における近現代日本医学史の概説，付録とされている「参考文献・資料」「年表」「書名索引」の充実ぶりも見逃せない．それらはいずれもそれだけで本来一書が編まれてしかるべきものである．特に，書名索引は，本書編集のもとになった資料，収録人物の主著などが網羅的に50音順に排列されており，これだけでも日本近現代医学史の文献一覧として通用するものである．各人物の縁戚関係も可能な限り所載を試みており，この点の充実ぶりも本書の有用性を際立たせている．

本書の編者は『外地の医学校』（2009年，メディカルレビュー社）の刊行によって，戦前の日本支配地域における医育機関の成立と帰趨をきわめて客観的に記述して，学会を瞠目させた．そこで示された編者の高い識見と卓抜した調査能力は，本書編纂の「序曲」に過ぎなかったことを改めて知らされた．今後もこの偉業が後代に受け継がれることを願うとともに，編者による更なる成果が生み出されることを願ってやまない．

（瀧澤　利行）

［医学書院，〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23，TEL. 03（3817）5600，2012年12月，A5判，810頁，12,000円＋税］

サミュエル・ガース 著，西山　徹 編訳，高谷　修・服部典之・福本宰之 訳，岡　照雄 序文『薬局――十七世紀末ロンドン医師薬剤師大戦争』

現在の欧米の医学史研究において主流となっているのは，医学系と人文社会系の双方の学問の視点を組み合わせて1980年代から発展した＜新しい医学史＞である．研究の領域としてまず確立されたのは，当時の人文社会系の学問で注目されていたジェンダー，差別，エスニシティ，医療倫理などと直接的に関係する主題であり，具体的には，出産，看護，精神医療，帝国医療，患者の視点などであった．この流れの中で，薬に関連する主題が大きく取り上げられるのはやや遅れた．1993年にバイナムとポーターが編集・刊行した『必携医学史百科事典』の薬学の歴史を扱った章は，薬効と薬理学を軸にした古いスタイルの記述であるし，1996年にラウドンが編集した『西洋医学図説史』では，そもそも薬の歴史を論じる独立した章がない．日本の東大駒場の科学史系の研究者を軸とする医学史研究においても事情は変わらず，2002年に廣野・市野川・林が編んだ『生命科学の近現代史』では，人種，優生学，生態学，性科学，フェミニズムなどの主題については独立した章があてられているが，薬の歴史に関する記述は章としては存在せず，索引にもほとんど登場しない[1]．

しかし，薬の歴史の研究は，個々の側面についてみれば明確に充実してきた．もともと研究の蓄積があった社会経済史系の医学史では，薬草の栽培や，国際商品としての薬に着目した優れた研究が世に問われ，文化史の方法を用いた医学史で